【「赤松小三郎エッセイ賞」特別賞】

赤松小三郎の衝撃と歴史認識

石井　光春

（８６歳、東京都目黒区、会社相談役）

八十数年の人生で、私の歴史認識に決定的インパクトを与えた言わば開眼的経験が、２度あります。1度目は大学3年(昭和33年)の時出会った著作、丸山眞男先生の〈現代政治の思想と行動〉(未来社刊上下2冊)です。２度目のインパクトは平成の後半、赤松小三郎研究会への参加と、同会員の関良基先生の著作、〈赤松小三郎ともう一つの明治維新〉(作品社刊)です。

前者では、日本は何故あの馬鹿げた対米戦争を起こしたのか、との私の疑問に、歴史認識における全く新たな視座(天皇制政体と軍隊組織の〈無責任構造〉という視座)を教えられたことです。

２度目のインパクトがこのエッセイのテーマになります。私は研究会に途中参加して初めて佐久間象山や坂本龍馬などと勝るとも劣らない[赤松小三郎]という幕末の異才の上田藩士を知りました。研究会参加1年後、関良基先生の上述の著作により、更に詳しく小三郎の生きざまと活動、時代背景、などを詳しく知りました。

小三郎の活動の凄いところは、明治維新前に、外国渡航経験が皆無にも拘らず、既に欧米文明、特にその代表である軍隊組織と武器に精通し、極めつけは、現代にも通ずる、近代感覚の憲法草案を幕府当局や薩摩藩主に提示していたことです。

ここで私には大きな[疑問]が生じました。これだけの活動と業績を残した赤松小三郎の名前が、明治は勿論、大正、昭和、平成を通じて、政府公認の学校教科書に、一切かつ一度も載っていないことです。今でも、です。佐久間象山や坂本龍馬は必ず載っているのに、です。一つ考えられるのは、維新で生まれた明治新政府がほぼ薩長藩閥で固められていたこと、そして小三郎が薩摩藩の軍事教練の先生だったにも拘らず、教え子の薩摩藩士に暗殺された、という歴史事実(暗殺が薩摩藩の指示かどうかは不明)が、明治新政府の赤松小三郎無視と何らかの関係があるのではないかという疑念です。史実としては未だ何も解明されてはいないが、研究会で小三郎物語が深堀りされればされるほど、私には１つの仮説ー彼の活動や業績が新政府には極めて不都合だったという仮説ーの納得性が高まって来るのです。一国の歴史は、[勝てば官軍]、勝者の都合の

良いようにしか書かれない、とよく言われるが、小三郎物語は言わばその典型ではないかとの推測が私の思考の中では次第に確信に変わりつつあるのです。
　時の権力が公認の日本史は、明治史に限らず新たな客観視座で再読解する必要性が常にあるのだ、と、この歳になって強く感じている次第です。

【選考理由】

　自己の歴史認識に決定的なインパクトを与えた２つの経験として、丸山眞男の著作と赤松小三郎研究会への入会・関良基氏の著作を挙げ、大きな歴史的業績を残した赤松小三郎が、学校教科書にいっさい載ってこなかったのは、「勝てば官軍」によるものではないかとの疑念、仮説が、次第に確信に変わりつつあるとする。
　自己の歴史認識から説き起こした骨太のエッセイである。

（「赤松小三郎エッセイ賞」選考委員会）